

安全なぼくの自まんの町

会津若松市立城南小学校 四年 上野 悠眞

「悠眞君の家に、パトカーが止まっているけど、どうして。」ある日の学校帰り、友だちがぼくにたずねてきた。

ぼくの家は、ぼうはん連らく所になっている。ぼくのおじいちゃんが、近所の人にすすめられて、ぼうはん連らく会に入ったことがきっかけで、連らく所になったのだ。そして時々、おまわりさんがやってきて、このあたりの安全について聞きにきているのだった。ぼくは、そのことを友だちに話すと、「おじいちゃん、すごいね。ここには、悪い人はいないでしょ。いたら、すぐに見つかっちゃうもんね。」と、友だちが感心しながら言った。おじいちゃんに、友だちと話していたことを伝えると、「このへんは、昔から安全だったよ。なんて言っただって、近所みんなが、なかがいいからね。あいさつをするし、よくしゃべっているから、何かあったらすぐに連らくがくるしな。」と、うれしそうに話してくれた。それから「じいのところに、悪い連らくがこないことがいい。ひまが一番だな。」とわらって言った。

よく考えてみると、ぼくは小さい時から近所の人に、よく声をかけられていたし、あいさつもぼくからしていた。この当たり前のことが、安全につながっているのだな、と思った。

この安全な町が、これからもつづくためにぼくに出来ることは何か、と考えた。

まず一つ目は、今やっている「あいさつをすること」をこれからもつづけてくことだ。登下校時、行きかう人に大きな声で自分からあいさつをしていきたい。自分からすれば、相手もしてくれて、コミュニケーションになるからだ。

二つ目は、地いきで行っている活動にせっきよく的にさん加することだ。毎年夏休みに、子どもが参加出来る「夜回り」にぼくは参加している。近所のおじさん達と、話をしながら、地いきのきけんな所を見回ったり、一人ぐらしのお年よりの家をかくにんしたりして歩いている。それでぼくも気をつけなくてはならないことを、覚えている。

ぼくが大人になっても、この地いきはずっと安全であってほしい。

今、ぼくがしていることは、ほんの少しの力かもしれないけれど、これから、友だちにも知らせていって、みんなで力を合わせて大きな力になればいいな、と思っている。

今日もおじいちゃんは、わらっている。「何なくていいな。ひまが一番だ。」おじいちゃんのエ顔がずっと見られるように、ぼくは今日も、近所の人に元気な声で「おはよう」とあいさつをする。